



Eld: Kou MUKAI
2-12-2, ASAHIMACHI, ABENO, OSAKA, JAPAN

25, Mar, '81 No. 245

通信 大阪府阿倍野区旭町2-12-2

向井 孝

▼一月中旬からはじめた「本つくり」のための準備作りが、二月になつて、もうそれに明けける感じが、むしろさびしい。その場が、このときをやる以外、みんないまあまわし。手紙の返事なども、まわめて20日に一週間くらいにやるなど、各所に、失礼をかかかかっている。

▼その前に、進捗しているかというところ。来訪者や電話や、行事・集金など、ふだん通りのことが、次々にあつて、落付かず、ひるまは机に紙をひろげて、たまにちよびりく書くくらいはあつても、殆どだめ。

▼夜二時ごろから、すこし進むくらいで、今のところ、まず「3」できたか、どうかというところ。本屋へ原稿を渡すのは、まあ五月……

▼そんなわけで、イオム通信も旧稿利用の苦肉の発行。あと二ヶ月は、どうもこの状態から脱けられそうもない。当分の諸事不行届、どら、ごめんばい下さい。

3月19日夜

本つくりの助っ人募集

つづつとつづつと。① ほぼ出来た原稿をよんで、感想を具体的にメモ又は口頭でなう。② 意味のとりたぐいとくろく。ムズカシイ古い廻しを、指摘したり、傍線をひいたり、数人で合議して、表現をかえる。③ 各文章の題名、サブタイトルのコメント、山見出し、をつける。④ テープに入れた討議や、口述をきいて、それをまとめる。できうれば、文章化する。⑤ 文章、付録資料、カット、ピラ等の構成、レイアウト

一つの時代の終り

向井 孝

僕らはある重大な演説を聴いてゐた。僕らはみんな熱心に聴いてゐた。時々僕らは激しい拍手を送つた

その時僕らのそばに、髪の毛の長い一団の男があつて、間違つた言葉と卑しげな野次を止めどなく飛ばした

それらの言葉は、どこか一種の政治家に似て、ごろつきに似

またどこか緑目の商人に似てゐた

この中野の詩は、詩としても出来がわるいから、中野にとつても迷惑な引用だろう。が、伊藤信吉の旧著「逆流の中の歌」——詩的アナキズムの回想——のなかで、「この詩はアナキズムの弱い面を衝いている(55頁)」とかいてあることもふくめて、ぼくにとつては、長いあいだ心にひっかかるものだった。

伊藤は、当時のプロレタリア詩の評価をめぐって、「……概括的に云つてプロレタリア詩は、詩的方法について関心が薄く、その主題をいそいで表面におし出そうとする傾向が強かった」と云い、また「詩以前にある第一義のもの——階級的命題が、しばしば詩的方法のりこえた(同書91頁)」といっている。

大正末期から昭和初期にかけて、アナキス

トたちが「演説もらい」と称して、ボル采集会のおちこわしをやつた事実がある。それが「アナキストの弱い面を衝いている」かどうかは、いまここで措くとして、このことをとりあげた中野の、この詩の内容も意図も、すこぶる明白だ。

「重大」な演説を、「熱心」にきき、「激しい」拍手をする「僕ら」に對比して、「間違つた」「卑しげな」野次をとばす、「髪」の長い「ごろつきに似」た一団が示される。

この詩で、とくに効果をあげているのは、まぎれもなく最後の一行の「また、どこか緑目の商人に似てゐた」という、中野ならではの「詩的方法」または「形象化」である。

この詩的方法において中野は、通俗の倫理道徳意識となれあつて、大衆の心理に潜在する、謂れのないある種の感情をくすぐり出すうとしてゐる。

もつとごつくばらんにいへば、緑目商人という職種を、差別的に賤称することで、無政府主義者を誹謗する、いやしい党派性をはたらかせてゐる。

例えばこの詩の「僕ら」を「人ら」にかきかえ、また主観的形容詞を、反対語におきかえてみると、中野の方法は一目して明らかに転する。

そしてさらに、この演説会を原動力発電所建設説明会としたら、ぼくの立場からは、ただそれを問答無用でぶつこわす以外にない。そのように立場によつていつでも、問題が逆転する。

とすれば、この「無政府主義者」と題する中野の詩は、伊藤のいう「主題を急いで表面におし出す傾向」を、何よりもき出しにしたものと云う以外にない。

このことは世評一般において、プロレタリア詩の欠陥を克服したとみられてゐる中野の「詩的方法」が、しばしば「階級的命題」正確には自己の内なる党派の命題の呪縛から、決してのがれられなかつたことを明らかにしている。

それを、いま改めて云うならば、中野がこの時、この詩において護ろうとし、なお戦前戦後、ひたすらに護ろうとしてきたものが、現在の代々木日共にはかならなかつたというひどい無残さは、文学としてどのような意味をもつものであるだろうか——ということである。

(付記) 中野さんが死んだ。いくつつかの個人的回顧のおもひのあとゆつくりと出てきたのは、「中野さんに代表される一つの時代が、はつきり終つたのだな」ということだった。

中野さんほどの稀有の人もまた、中野さんが把持したその「思想」の呪縛にとらえられて、次の新しい時代の波に、いつしか追いつかれ、やがて沈む。

だからもし、中野さんがこれからもなお生きつづけるとき、その「マルクス主義者」としての党派性に誠実であろうとすればするだけ、どうしようもない文学の悲惨さとして、時代がそれをあらわに示すことになるだろう。

そのことは、かつてのプロレタリア詩がいまは過去の時代の栄光となつてしまつたように、実は詩以前、文学以前の問題に基因することにおいて、「そこの悲惨というほかない。

79年10月発行
コスモス26号



ピラについて

向井 孝

陸橋をのぼりかけたたん、つと、ピラが差出された。一韓国への公書輸出をやめるノ関西実行委員会……

と、のぼりきつた処で、また一枚。大阪日中友好祭……日曜日の午後四時。時計はまだ十分まえを指している。

天王寺駅から近鉄百貨店へと渡る通路は、ゼニガメや動く人形を箱の上にならべた大道商人で、緑日のようなだ。

手すりにもたれて動かない一群は、ぼくと同じように、誰かを待っているのだろう。

通路の降り口にダンボール箱が二つおいてある。丸めたり、折りたたんだり、そのままの新しいピラが、投げこまれてもろあがつている。

とおりがかりの半数が、手にしたピラを、さつさと棄てていく。ときどき風が、二枚、三枚と吹きちらす。足許にきたそれを、ぼくはふとひろいあげる。それからさつきうけとつたピラも一しよに半分に折って、紙ヒコーキのように飛ばす。

飛ばす途中で、おもわず手がとまる。一投げ棄てられるのは、ぼく自身ではなかったか……

いま眼下で一せいにスタートした自動車の、はげしい騒音の中へ、まるで身投げのように、ピラの一枚が落ちていく。

X X X X X
思えばこの十年間、ぼくもまた同じようにピラを、せつせとつくってまいてきた。

新しい仲間と一しよにまいたピラの数は、およそ三百種、十数万枚になるだろう。

原稿を作り、ガリを切り、それから刷って截断して、発送用の封筒かきや切手はり、そしてきょうは手分けしてのピラまき……

そのときどきの手伝いはあつても、殆どの仕事は一人二人でやらねばならぬのが、常だった。

だがしかし、そうしてまいたピラ一枚一枚の、おもえば空おそろしいほどの数は、一体どこへ消えてしまったのだろうか。

出来上ったピラをかかえて、一せいに街へとび出していく、あの意気込みやおもしろい結果は、いまだ一体どこにのこっているのだろうか。とすればぼくにとつて、ピラとは本当に何なのか……

配ることと同じように、受け取ることが棄て去ることではない、ピラとは何か。手渡した瞬間から、その掌のなかでみるみる皺ばんでいく、紙きれの意味とは一体何か。

もともとピラは、それそのものとして、文字が印刷された一枚の紙片にすぎない。

とすれば、文字が意味する内容と、その形象化としての印刷技術そしてそのまき方こそがピラを紙片とちがわせているものである。この三つを完全に具足すればするほど、ピラはますますピラとして機能するだろう。

だが、そのことに加えてそれ以上に、自分がつくり、自分がまくピラは、何よりもぼく自身、おのれそのものの提示を意味している、それだからこそぼくはピラをつくるのだ。

X X X X X
そうなのだ。ピラは、それゆえに、ぼくなのだ。

そしてまたぼくのピラまきは、渡したピラをぼくとして受けとめる、何千、何万回の一回の(出会い)の相手のためにこそある。

だがそのようにしてまくピラをそのたびごとくぼく自身として、その一枚一枚を出会いのために、ぼくはつくってきたのだろうか。

つくりものことばでかざられた、しごくおびやかなピラの内容も内容なら、ピラまきのやり方もともかく早くすますために、手当り次第に配るだけではなかったか。出合いは、もともと一対一のものだとすれば、ぼくはまず(ぼく自身)が完全にピラとなる(こと)で(ピラ)をぼくとして受けとめる(相手)と出会う以外にない。

そのために、すくなくとも第一一ただ一人、その相手のおもいを、ぼくのおもいとすることができるときだけ、訴える。

第二一かざらず、気取らず、ざつくばらんに、目こる使いなれた会話ことばで云えるときだけ、書く。第三一ただ一人、その相手との出合いのためゆえに、そのためにのみピラをまく。数ではない。

……
午後四時三〇分

ぼくの待ち人は、まだ姿をみせない。

左右の階段から盛りあがってきて、とめどなくあらわれる人たちは、橋のまん中でぶつかり波打ちながら、とび散ったピラを何気なく踏んで通りすぎる。

夜から雨という天気予報だが、橋上は薄い西日が射ってきて、いま、一だんとにぎやかなざわめきだ。

遠く夕映えのビルとビルとのあいだを走る、高速道路の空のむこう、生駒山はきょうは、煙霧で見えない。

余白に

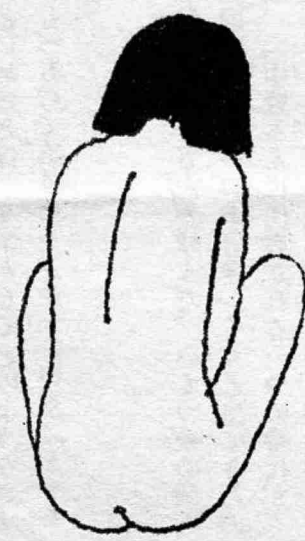
朝日の夕刊に山中陽太郎さんの文章がのつていた。……以前寺山修司に「山中つてホントに運動信じてるの、女より平和が好きなの」とあの口調でいわれて、まいった。つい先だつて諸湯のかより佐木隆三から「山中をして運動にかりたてるもの、それは何です」と向われた。ふんばら「若気の至り」でもごまかすのだが、マジメな向いに「ぼくを作ってくれたものは反動運動だもの、そのお返しです」……

寺山を知つてるわけではないが、あの口調が腹にうかんようである。ぼくなら、「ヒトのこと放つとけ！ テメエが平和より女が好きなのは勝手だが、平和だからこそ、女が好きとホザいてくれることを忘れな」と一パツわけ知り顔のおぼけ面に喰わしてやりたいところである。

佐木の場合、ものがき暮しの甘い文壇生活についていながら、でしまつて、自分の中からすでに失いつつあるものについて、無自覚のまま、自分自身の問題を山中の向顔としてきいていて、としか云いようがない。

このような二人の立場や心境について、ぼくは特に抗議をするつもりはないが、佐木から寺山へは、あと数歩、そして山中から佐木へも、あと数歩というイマが感じがする。

山中さん、こんなてあいを、決して相手にするな！
そのわけ知り顔の分別くさい向いこそがクセモノだ！
「若気の至り」ではなく、若いからこそ、運動ができるのだと、叩き直つて去つてやれ！



三月六日早晩、逸見吉三さんが七くおつた。享年七十九才。寫真の中で花に埋つた逸見さんの面影は、全くふだんと変らず、や、青白く平つたい顔で、すかんに眼をこらしていた。長いおぼんとくごろうさんでした。と七日、訣れを告げた。遺族は、弟さんの菅本三郎さんへ塚市植塚台二丁〇一〇一〇。

イオム通信送付希望の方は、封筒に宛名をのみき、切手を貼付したは付用封筒を6-10枚(宛先はイオム通信)を